

「大隈重信」 上巻

伊藤之雄著

はしがき

京都大学の教授が「大隈は有名なわりには、伊藤博文や原敬と異なり具体的に何をしたかがわからない」、早大法学部出身の院生が「大隈がどんな人でどういう功績を挙げた人かが本当のところよくわからない」と言っている。彼らは優秀な人たちであり大隈について何も知らないからわからないというのではない。 i

1922年1月の「東京日日新聞」は、「大隈の政治的生涯が、果たして成功と目すべきものであったか否か、恐らく歴史家も是が論定に苦しむであろう。 i

なぜ大隈はわかりにくいのか。それは大隈についての個々の事実から形成されるイメージが論理的に統合される明確な像を結んでいないであろう。 i

大隈の持つイメージの一つは、1920年（大正9年）早稲田大学を創設した。もう一つは、佐賀県出身で維新に向けて活動し、新政府に入って参議兼大蔵卿などの高官に昇進したが、1881年（明治14年）10月の政変で追放された。1882年（明治15年）に立憲改進黨を組織して自由民権運動に加わり、改進黨はその後発展し、他の政党と合体し、1910年代には立件同志会となり、近代日本の二大政党形成の端緒を作った。大隈は在野で活動した「民」の政治家であった。 iii

もう一つの特筆すべきことは、中年（51才）になって爆弾で片足を失いながらも、その後「元気」旺盛であった。そして1922年（大正11年）の大隈の葬儀に「100万人」とも報じられる国民が集まり熱烈な追悼の気持ちを表したのはなぜだったのか。 iv

序章 大隈重信はどのように描かれてきたか

大隈は1922年（大正11年）1月10日、83才で死去した。死亡の直前に従一位大勲位菊花章頸飾を授与された。これは伊藤博文、山県有朋に並ぶものである。 3

大隈の葬儀を国葬にという声もあったが、支持者は「国民葬の礼」もってすることが最もふさわしいと発表した。これまで国葬が行われたのは伊藤博文ただ一人であった。 4

大隈の葬儀は、1922年1月17日、日比谷公園音楽堂前広場で「国民葬」の形で行われた。

大隈の葬儀には、早稲田の大隈邸から日比谷公園までの沿道、同公園から護国寺までの沿道に集まった人々は100万人で、150万人と言われた明治天皇の御大葬以来の人出であったと報じられた。 7

日比谷公園には早大教員や学生13000人、大隈が設立に協力した日本女子大生1000人が並び、一般の人々が早大生らに続いて祭壇に向かい拝礼した。公園に入りきれなかった人々が神田橋のあたりまで続いた。大阪朝日新聞、読売新聞が20万に、数十万人と報じているので、全行程の沿道も含めて100万人以上という数字は、非常に誇張したものではないと言える。 7-8

大隈という大物政治家の実像がはっきりしないのは、大隈が直筆の文章を明治維新後ほとんど残していない。日記はもちろん、直筆の手紙や文書が残っていないことが関係している。大隈の実像をつかむため、本書では、その生涯についてできる限り資料を読んだうえで、特定の分野や時期を限定せずに大隈を検討し、大隈が近代日本と国民にとってどういう存在であったかを考えたい。 14

第一部 青春篇

第1章 人格の形成と維新への志

一幕末の佐賀藩

江戸時代唯一、西洋に開かれていた長崎港を警備する役目は佐賀藩と福岡藩に1年交代で任されていた。大隈家は長崎を警備する大砲の責任者であった。 24

1808年（文化5年）、イギリス軍艦フェートン号が長崎に侵入し、オランダ人2人をとらえるなどの事件が起こり長崎奉行は責任をとって切腹した。これ以降、佐賀藩は海防強化に努めた。佐賀藩が長崎警備の責任を持っていたことは海外の情勢を知るうえで他藩に比べると非常に便利であった。 24-25

大隈の青春は藩校弘道館の厳しい「課業標準」とともにあった。

課業標準：弘道館の厳しいシステム。25才までにその標準に達しないと藩の役職に就かせないばかりか、家禄の半分を召し上げる。 29

大隈は喧嘩をして「決して人に負けたことはなかった」。太ってはいないが、小さいほうではなく、骨格が優れて丈夫で腕力も強かった。 31

1830年、藩主鍋島直正が家督を継ぐと改革に乗り出した。直正は、開国して日本を発展させるべきという考えの持ち主であったが、幕府と連携する姿勢を最後まで捨てられず、佐賀藩は維新への本格的な参画が遅れ、それが薩長出身者に対して大隈の立場を困難にした。 37

大隈は 17 才のころ、朱子学中心主義の反対派の首謀者の一人として弘道館を退校させられた。38

大隈は、藩主鍋島直正の意思で蘭学寮への入学を許された。1861 年、大隈は蘭学教導になる。41

1866 年（慶応 2 年）1 月薩長同盟、幕府の第二次長州出兵失敗。41

大隈は 1862 年（文久 2 年）頃には、日本を天皇・朝廷中心の国家体制とし、列強と貿易をして日本の国力をつけようというビジョンを固めていた。43

1860 年（万延元年）3 月 3 日、井伊直弼は桜田門外で暗殺された。46

大隈は貿易活動に乗り出す。佐賀藩は外国から艦船や機械を購入し、特産品の輸出で支払いを行った。49

1867 年（慶応 3 年）、15 代将軍徳川慶喜は大政奉還（将軍職返上）の上表を朝廷に提出した。12 月朝廷は王政復古を宣言し、御所内の小御所で会議を開き。長州藩の復権と、慶喜に納地・辞官を命じた。これは、薩摩藩や薩長両藩を支持する岩倉具視ら公卿による徳川勢力打倒の動きであった。58

状況が切迫すると大隈は鍋島直正の前に召され、時世について意見を求められた。大隈のような「書生」が藩主に意見を求められることは、「実に破格の特例」であった。58

第 2 章 列強との交渉で抜きんでは — 維新後のキリシタン・財政問題

大隈は佐賀藩が重要な役割を果たし、薩長や全国に対して存在感を示し、改革のリーダーに加わるべきと改めて提言した。直正が逡巡している間に 1867 年（慶応 3 年）末、鳥羽・伏見の戦いが始まってしまい、佐賀は維新への参画の大事な機会を失ってしまった。しかし、大隈の時世に対する見通しの確かさを藩の最高幹部に印象付けたことから大隈の運が開ける。63

その後、長崎は薩長土肥の代表会議で行政・政治を処理することになった。薩摩は野村盛秀（パリ万国博覧会の薩摩代表、のち長崎県知事）、松方正義（のち参議兼大蔵卿、首相）、長州は楊井謙蔵、土佐は佐々木高行、佐賀は大隈と重松善右衛門であった。63

大隈は長崎裁判所の参謀助役に任じられ、外交事務を行うよう命じられた。当時長崎には、

ポルトガル・イギリス・ロシア・アメリカ・フランス・ベルギー・オランダ 兼 スイス・デンマークの各国領事館が駐在していた。ここで大隈は、本領を發揮する。 65

長崎では、各藩と列強商人との貿易をめぐる数年来の訴訟が、解決されないまま、数多く残されていた。大隈はその処理を任され、列強商人に向かって、取引その他で日本人に対し債権を請求するものは2ヶ月以内に各領事を通して日本の合議所に要求するよう呼びかけた。また、2ヶ月を過ぎたら債権を有していてもそれは消滅すると各領事に伝えた。大隈は書類に従って裁断を加えていき、2ヶ月で処理している。

この間、外国人は絶えず不服を唱え、各国領事が連合して事務所に迫った。松方らは非常に憂慮したが、大隈はいったん裁断したものは決して変えず、毎日外国人と論争してようやく切り抜けた。大隈は、裁断において最も重要な「公平」という基準を決して失わなかった。外国人もそのことを理解すると、やがて大隈の行為に信頼を置くようになった。 66

不平等条約の下、当時裁判権は日本ではなくその外国の領事館にあったので、外国人が不正を行った場合に領事が事件にふさわしい裁判を行わなかったら、大隈は、長崎の日本商人に命じ、共同でその外国人を拒絶させた。つまり、穀物や織物などを売らせないようにして不正な外国人の行動を阻害した。 66

大隈は1868年、新政府の最も重要な三職の中で、総裁、議定に次ぐ参与に任じられた。参与には西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允ら有力藩を代表する藩士、各藩の代表、公家が就任していた。新政府の実権を握っていたのは、三条、岩倉の倒幕に活躍した公家の議定と西郷、大久保（薩摩）、木戸、広沢直臣（長州）、後藤象二郎（土佐）らの有力参与であった。 67

長州の井上馨や伊藤博文は大隈より早く参与に任じられていた。大隈は坂本龍馬らとも交友があり、大隈、伊藤、井上、中井らは木戸を盟主に大蔵省を中心とした木戸派の中核となり急進的な近代化を進めていく。 68

大隈は1868年4月、東本願寺別院で、浦上キリタン（隠れキリタン）事件、新潟・大阪の開港問題、江戸の開市問題について、日本政府と英公使パークスとの交渉に臨んだ。日本政府側の出席者は、大隈の他に、三条、岩倉、（いずれも副総裁）、山階宮晃（ヤシナミヤキウ）親王（外国事務局長官）、伊達宗城、坊城俊章（いずれも外国事務局次長）、木戸孝允（総裁局顧問）、後藤象二郎（総裁局顧問兼外国事務局判事）、伊藤博文、井上馨（いずれも外国事務局判事）ら12名であった。 74

大隈の主張にパークスは反論できず、会談は「喧嘩別れ」に終わったが、パークスは「道理」のある人なので、そのために日本と列強の関係が破たんすることはない、と大隈は読んだ。浦上キリタンの処分は、当分このままにしておくがよいなど、これら大隈の判断で、新政府は一時的に難関を切り抜けることが出来た。パークスとの交渉で能力を示した結果、大隈は木戸、大

久保利通、広沢直臣ら薩長を中心とする新政府の有力者と自由に談論できるようになり明治政府の間に一地位をしむる」ことに成功した。 77

大隈は、幕府の横須賀造船所をフランスから回収するためにフランスからの借入金 50 万両の一部返済金 25 万両を大阪商人を「脅迫」して手に入れたが、彼は、25 万両で江戸の治安を確保するほうが良いと考え、大村益次郎（長州出身軍防事務局判事加勢兼江戸府判事）に話した。しかし、江戸にいた西郷（征東大総督府参謀）は勝海舟（旧幕府軍軍艦奉行）と連携しており、旧幕府残存勢力を強硬に鎮圧しようとしなかった。大隈に協力したのは盟友の江藤新平（江戸府判事・江戸鎮台判事）であった。江藤も江戸の治安の悪さを憂えていたので、昼夜兼行で京都に上って三条実美（輔相:ホヨウ）、岩倉具視（輔相）、木戸孝允（参与）ら新政府首脳から旧幕府勢力鎮圧の同意を得た。 79

明治元年 5 月 15 日、新政府軍は一日で上野の山を拠点としていた彰義隊を鎮圧した。江戸の治安を確保することの重要性を思った大隈は江藤の協力を得て、三条実美、岩倉具視、木戸孝允ら新政府から旧幕府鎮圧の同意を得た結果であった。佐賀藩兵の阿姆斯特朗砲は威力を発揮し政府軍の勝利に貢献した。 80

1868 年 8 月、大隈と小松帯刀は大仕事を終えて京都に戻った。25 万両を彰義隊など旧幕府勢力の鎮圧に使った決断力、横須賀造船所の負債額は当初 50 万両と言われていたが 30 万両程度とフランス側に迫って確認をとったという気迫と緻密さ、といった大隈の長所がこの出張で発揮された。大隈は佐賀藩のために尽力した功績で准家老に遇せられた。 81

大隈は外国館副知事に任命された。それ以前に公家・藩主かその子弟以外で副知事についていたのは、小松のほか大村益次郎だけであった。小松も大村も維新の薩長の有力者であった。大隈が意外にも副知事に抜擢されたのは、維新以来列強との外交交渉で実力を示し、その実績を木戸らが評価し、小松の推薦があったからだ。 86

幕末から維新にかけて、幕府や新政府が二分金・一分銀などの貨幣の品質を落として鑄造した。このため、貨幣の質を見分けられない外国人商人の中には大損をしたものが出て、列強は贋金と品質の悪い一分銀との引き換えを要求した。大隈は、列強との交渉に不慣れな由利に代わり、大物の英国公使パークスとの対応を一手に引き受けることになった。 86

由利公正は、1867 年（慶応 3 年）新政府の参与となり財政の実権を握った。明治 4 年貨幣制度を金本位制とし、貨幣の呼称を従来の両を円に改め純金 1.5 g を 1 円とし、10 進法による新貨幣を発行した。一方、大隈は明治 2 年から明治 11 年まで参議兼大蔵卿などのポストにつき一貫して財政政策の中心にいた。しかし、大隈と由利は財政政策について相いれないところがあったが、由利は大隈に対抗することが出来なかった。 92

1869 年（M2）、大隈は三枝綾子と結婚した。 94

第 II 部 飛躍編
第 3 章 木戸孝允派の実力大蔵官僚
急進改革路線の推進

1869 年 (M2) 3 月の段階では、木戸と大隈は、廃藩置県、キリシタン問題、会計官の紙幣や財政問題、欧州への視察など近代化政策で共通していた。大隈は参与兼外交官副知事に加え、会計官副知事 (のちの大蔵次官) も兼任し、名実ともに外交と財政の実務を掌握した。101

その後、大隈は外交官副知事を免ぜられた、会計官副知事専任となった。しかし、英国公使パークスとのキリシタン問題など大事な外交交渉に当たっては、木戸、大久保、岩倉、三条首脳にとって大隈は頼るべき存在であった。102

会計官副知事としての貨幣問題と同様に、大隈が強い意欲を示したのは、1869 年 6 月に入って焦点となった版籍奉還だった。「急激の処置」は木戸や大久保は望まず、大隈と伊藤博文は「急激の改革の断行」を主張し論争した。大隈や伊藤の考えは、この際「版籍 (土地と人民)」を中央政府に没収し、各藩歳入の 1/20 を藩主に給して藩主一家の禄とし、藩の有力者も藩主に準じて同様の待遇を受け、各藩の余った歳入を新政府のものとする。さらに、各藩の兵権を中央政府に吸収しようとするものだった。大隈と、伊藤らは実質的に一気に、廃藩までもっていく版籍奉還を理想とした。106-107

大隈は木戸に能力を買われて信頼を得、木戸派の中で木戸に次ぐ存在であった。また、この時点では、三条や後藤、板垣も木戸派を支える存在であった。111

山県有朋は軍制改革を調査するため、木戸の推薦で渡欧中であったが、帰国後に兵部少輔 (シヨウゴ) から陸軍大輔 (タイフ) (次官クラス) となり、徴兵制を導入する陸軍近代化への大改革を行い、木戸派の一員になっていく。111

大隈は大蔵大輔 (次官) に任じられた後、1869 年 (明治 2 年) に地方行政を担当する民部省の大輔に転じ、8 月 11 日に民部省と大蔵省の合併に伴い、大蔵大輔も兼任することになった。木戸派を背景とする木戸派の大隈らは、日本の財政、税務、貨幣、地方行政、商工鉱業などを事実上掌握する大きな権力を得たのである。112

こうして彼らに、廃藩に向けた重要な改革が出来る可能性が強まると同時に廃藩への意欲も強まる。廃藩を実施するには、まず各藩にあった軍事力を中央政府に集めなければならない。大隈が木戸に会った際、各藩が中央政府の軍事費を出させるのではなく、各藩の必要な予算を出させ、残りを全部中央政府に出させて軍事費とする構想を話した。113

大隈は築地に 5000 坪の敷地を持つ邸宅をかまえ、「梁山泊」という名前がついた。大隈は

「進歩派の同志を得たことは大隈一人の幸福のみならず、国家の幸福であった」と回想している。その同志の中には、伊藤博文、井上馨、前島密、渋沢栄一、五代友厚、北島治房らが出た。114

大隈と伊藤は新橋―東京間の鉄道施設を推進した。ロンドンのオリエンタル・バンクから100万ポンドの外債を公募することに成功し資金調達を行った。外債公募契約から2年を経て、明治5年東京―横浜間の鉄道の開業式が行われた。その2年後大阪―神戸、5年後京都―大阪の鉄道を開設した。118

木戸や大隈と大久保の対立の根本は近代化のスピードの問題であった。大隈ら木戸派は、近代的な統一国家を作り列強に対抗できるようになることを最優先と考えた。木戸、大隈は急進的、大久保は地方人民を養い治めるという近世的牧民意識が強かった。121

1870年(M3)、大隈は、木戸、木戸派の粘りがあって、大蔵大輔兼任のまま参議に昇進し、初めて「入閣」する。大隈の大蔵省での基盤はさらに強まった。133

第4章 木戸派からの排除 ―廃藩置県以降

廃藩置県を目指した大改革は薩・長・土とりわけ薩・長が中核となり進んだ。大隈は参議兼大蔵大輔という要職に在りながら廃藩に関する会合から外れていた。138

大隈は1871年(M4)参議を免じられた。142

1871年7月再度人事が行われて、「内閣」は三条(右大臣→太政大臣)、岩倉(大納言兼外務部)と西郷、木戸、板垣、大隈の6人で構成されるようになった。これは、薩・長・土・肥四藩のバランスをとっての大改革であった。143

1871年(M4)木戸、大久保、西郷らの密議を経て、三条、岩倉の合意を取り付け、明治天皇の裁可を受け7月14日に廃藩置県が発表された。旧藩主である200以上の藩知事が罷免された、薩・長・土からの御親兵という軍事力を背景に、廃藩置県は大きな混乱なく実行された。145

1872年(M4)、木戸は木戸派を大隈を中心とするものから、長州出身の伊藤を中心とするものに変えた。大隈と木戸が疎遠になったのは、木戸が大隈の急進改革路線に疑問を持ったためである。147-148

第5章 独自の基盤構築への模索 —留守政府・征韓論政策

1872年（M4）、岩倉使節団の中核が岩倉、木戸、大久保、伊藤に決まっていた。大隈は、岩倉使節団には入らなかった。留守メンバーは三条、西郷、大隈、板垣、後藤、井上、山県、他であった。 163

「征韓論」とは、朝鮮を開国させ不平等条約を結び、列強に対し日本の力を示して安全保障を図るとともに、士族の不满を発散させようとするものである。最大の問題は、朝鮮の宗主国である清国と戦争になる恐れがあり、それによって、日本が消耗して近代化どころではなくなることである。留守政府の中では、西郷隆盛が征韓論を強く唱え始め西郷は自ら使節となることを希望しており、朝鮮との開戦の可能性も考慮していた。西郷が開戦論を唱えた大きな理由は、板垣らの征韓論と同様に士族の不满、とりわけ薩摩士族の不满を解消して国民を一つに結集させるためである。 174

1873年西郷は征韓論に積極的で、大隈は特に反対していない。西欧から岩倉、伊藤らが帰国した。大久保、伊藤、三条、岩倉は征韓論に反対した。 182

1873年（M6）10月、諸々の駆け引きがあったのち、最終的に岩倉は征韓派参議中の西郷、副島、板垣、江藤の4人と会い即時使節は派遣できないと述べ、天皇に岩倉の意見を述べてその判断で決定すると伝えた。西郷は使節派遣が出来ないのを察して直ちに辞表を提出することを決意した。 188

明治天皇は、岩倉の上奏を受け入れる勅書を与えた。西郷、副島、板垣、江藤、後藤象二郎、の征韓派5参議は辞表を提出し受け入れられた。政変後の新体制は大久保が主導し、大隈参議が大蔵卿兼任、大木喬任参議が司法卿兼任、伊藤が参議兼工部卿、勝海舟が参議兼海軍卿、寺島宗則外務卿が参議兼任となった。 190

政変後の新体制で、大隈は確固とした地位を築いたかに見えたが、その地位は木戸により脅かされそうになる。木戸は、大隈の大蔵卿兼任が不満であった。 191

第6章 大久保利通を支える —台湾出兵・西南戦争

「佐賀の乱」は江藤新平を擁して不平士族が乱を起こした。1874年（M7）、征韓論政変の翌年、不平士族の活動が強まり、前年以上の激動の年となった。1月14日岩倉具視右大臣が、赤坂の仮皇宮を出たところで征韓論政変に不満を持つ高知県の士族9人に襲われ負傷した。1月17日、西郷、板垣、（土佐）、後藤（土佐）、江藤（佐賀）、副島（佐賀）らは、民選議院

設立建白書を提出し、藩閥専制政府を批判した。4月10日、板垣らは当地に自由民権運動の政治結社である立志社を作った。 197

大久保は、佐賀の乱の鎮圧や賞罰の全権を与えられ、横浜、大阪を經由し約1500人の部隊を率いて福岡に上陸した。激戦の末反乱軍を撃破し江藤ら首謀者は4月13日処刑された。 198

1875年(M8)、大阪で大久保、木戸、板垣、伊藤、井上が会合した。大阪会議という。ここで、内閣人事が決まったが、大隈は知らされていなかったが、参議兼大蔵卿として踏みとどまった。大阪会議の結果、大久保と木戸・伊藤のつながりが深まり、大隈は政府中枢で孤立していった。 221, 223

1877年(M10)1月、西南戦争が始まった。 237

1877年(M10)9月、西南戦争は西郷が自刃し終わった。 241

第III部 希望編

第7章 自由民権運動に賭ける

一明治十四年政変

1878年(M11)、天皇は大隈邸に行幸した(公式にはお立寄り)。伊藤は、大久保に大隈邸行幸に反対を伝えていた。 245

1878年(M11)5月14日、明治政府の最高実力者である大久保利通は、紀尾井坂で、石川県士族ら6人の襲撃を受けて殺害された。暗殺者たちは「藩閥専制」に不満を持っていた。大久保の跡を継いだのは伊藤博文だった。 248

1879年(M12)、五代友厚(薩摩)は友人の大隈へ心からの忠告を手紙に書いている。大隈は、自信満々のあまり、才能や知識のないものを見下し、事前に皆が納得するまで説明するのをまどろっこしく感じて決断を急いだり、たびたび「怒気怒声」を発したりした。手紙は、これらをいさめる内容であった。一方、大隈は政府内で薩長出身でないがゆえの悲哀を味わいながら、ウイジョンを実現すべく、大隈の上司と言える木戸、三条、大久保らとの関係を時期と状況に応じて巧みに深めて来た。後輩の伊藤博文に対しても伊藤が政府の中心になると自ら下手に出て関係を維持した。そして、薩摩系の五代、西郷、吉田清成、松方正義らとも関係を作ることが出来た。 253

大隈と福沢は1878年(M11)ころにはかなり親しくなっていた。 255

1879年(M12)、国会開設運動が広まっていく。 265

1881年(M14)3月、大隈は有栖川宮親王を通して明治天皇に、他の大臣・参議に見せないことを条件に国会開設意見書を提出した。その内容は、早急に憲法を制定して2年後に国会開設するというものであった。 270

この意見書が急進的でありにも現実離れしていたことに加え、最大の問題は、この意見書の内容を伊藤に秘密にしていたことであった。有栖川宮は、大隈との約束を破り、大隈の意見書を内々で三条と岩倉に見せた。最終的に岩倉は大隈の意見書を伊藤に見せた。 276

大隈は、伊藤が意見書を読んだことを知って「大いに驚き、有栖川宮殿下を恨み奉ると申し上げた」という。伊藤は、大隈の態度に憤慨した。一連の動きで大隈が参議を「罷免」される10月の政変の方向に歯車が回り始めた。 281

1881年(M14)10月11日、大隈を除いた参議一同から、憲法制定と国会開設(1890年:M23)、および大隈の免官が上奏された。天皇は大隈の免官には消極的であったが内閣の意見ということで、いずれも承知した。 291

大隈への辞任勧告は、伊藤が引き受け、10月11日西郷従道(西郷)が同道し、大隈邸に赴き伝えた。大隈は勧告を受けるとあっさり辞任を了承した。 291

第8章 欧米風の政治と「国権」 —立憲改進黨の党首

大隈のブレーンとして29歳の小野梓が活躍し、改進黨の草案を大隈に提出した。 299

1882年(M15)、立憲改進黨の発起式が開かれ、大隈が総理(党首)となった。すでに自由党は板垣退助が総理に1881年(M14)に結党されていた。 301

1882年(M15)10月2日、早稲田大学の前身である東京専門学校が開校式を行った。最初は、政治学科、法科、文科三科で出発した。 306

<早稲田大学設立の意図>同校職員の小野梓の祝辞から

1. 「本校の恩人大隈公」は「一箇の大学校」を立て後世に残し人々の役に立てようと思っていた。同校は大隈と小野梓を中心に創設されたのである。
2. 「一国の独立は国民の独立に基し、国民の独立はその精神の独立に根ざす。国民の独立は実に学問の独立による」。これは大隈の次のような信念に基づくものである。
 - ⇒ 自由独立の精神に富む
 - ⇒ 第二国民を作る

⇒ 十数年後には日本語で教授する「大学」を目指す

当時の最高学府である東京大学で西欧の学問は、お雇い外国人教師によって外国語で教授されていた。大隈や小野らは、高等教育は日本語で行えるようにならなくてはいけないと考えていた。

3. 「政治を改良し」、「法律を前進」させるために、政治法律学科を先に置き、次に理学を置く予定である。

4. 正科のほかに「英語の一科」を設け、学生に原書を自分で読める力を養わせる。

5. 「政党以外に在って独立せしめん」。

これらは、東京専門学校に在る学生に、イギリスを中心とした政治・法律の基本を身につけさせ、日本を藩閥政治から脱却させる自主・独立の精神を育成する。そのうえで、自分で判断させ、日本が独立を維持・拡大するリーダーに育成しようという小野と大隈の共通する目標であった。

307

1882年（M15）、大隈は「下野した者の挙動を見ると江藤、前原一誠、西郷隆盛、後藤、板垣のごとき誰一人として身の振り方の正しき者なし、余はこれより明治政府の職を辞したる貴顕紳士の手本を出さん」と述べている。

311

1880年代は、伊藤を中心として井上、陸奥、山県や原敬らが、国際規範とそれに基づく国際秩序の重要性を感得し身に着けていく時期である。

320

1887年（M20）、大隈は、板垣、勝、後藤とともに華族に列せられ伯爵を授けられた。

322

第9章 条約改正の失敗

一強気の外相

1888年（M21）2月1日、大隈は伊藤が兼任していた外相に就任し、伊藤内閣の一員になった。伊藤内閣の後の黒田内閣でも外相を務めた大隈の勢力は拡大し大隈邸への来訪者は多岐にわたった。

333

1889年（M22）2月11日に、大日本帝国憲法が公布された。

341

<条約改正の趣旨>

大隈は、欧州列強は「利己政略」を採っていると見た。大隈は、列強との現条約中にある最惠国条款について、日本政府が仕方がないと考えている点を批判した。それは、列強のある国と日本が新条約を結んで、その見返りに新しい特権を与えるようになった場合、ほかの列強は無条件に新しい特権を与えられるとするイギリスなど列強政府の身勝手な解釈であった。

336

同年、条約改正を強硬に推し進めた大隈に対する反対の声は高まった。大隈を支持していたのは黒田首相と榎本武揚だけで、条約改正を唱えた一人の青年が大隈に爆弾を投げ、大隈の足の下で破裂した。大隈は大腿三分の一で、右足を切断された（大隈 51 才）。大隈が爆弾で重症を負った後、黒田首相を説得し条約改正は延期され黒田内閣は倒れた。大隈も辞表を提出し受理された。 347

大隈は土地投機で財産を得る。 349-357

大隈はあるとき、一時に 60 万円の土地を買ったが新聞に 60 万円と報じられたので、ある人に「あれは 65 万円（現在の 260 億円）（1 円＝今の 4 万円）だよ、これで 125 歳まで寝ていて食える」と語ったという。また、大隈は財政的に苦しくなると、旧藩主の鍋島侯に土地を買ってもらって資金繰りをしたという。当初鍋島侯は迷惑だと思ったが、東京、神戸、朝鮮、などの土地が値上がりし大きな資産を作ったという。 353

大隈の家計	(1 円＝今の 4 万円)	
収入：	15,462 円	(今の 6 億 2 千万円)
支出：	14,653 円	353

大隈は明治 14 年の政変で下野するまでや黒田内閣に外相（M21 年頃）として入閣した際の権力、情報、人脈や、持ち前の交渉能力、決断力を生かして収入源を作っていた。日本の近代化に関連して、発生するさまざまな新しい事業の認可問題などに影響力を及ぼし、また自らも株を保有し、さらに、土地の投機でかなりの資金を得ていた。 357

第 10 章 初期議会の可能性を探る — 「責任内閣」論と日清戦争

1890 年（M23）、帝国議会開会、第一回総選挙が行われた。議席数 300

民党系	旧自由党	105
	改進黨	46
	その他	149

立憲改進黨は旧自由党系の半数以下であり、改進黨の敗北は明らかであった。 361

1890 年、改進黨は代議士総会を開き、大隈は会長になり、事実上の党首就任である。 372

1893 年（M26）、「郵便報知新聞」は、「大隈伯爵昔日譚」を連載した。内容は「佐賀藩の学制」から始まり「征韓論」（征韓論政変）で終わった。 375

大隈は国民のよく考え抜かれた理性的な意見である「輿論」と、むしろ気分に影響された意

見である「世論」を区別している。大隈は輿論に基づいた政治を理想とし、中級以上の自立した個人がリードしているイギリス風の政党政治を目指した。 379

1892年(M25)、第二次伊藤内閣が出来た。外相を外された大隈は、在野において改進黨に積極的に関わり始めた。1890年代の動きに合わせるために改進黨の政策を定めた。責任内閣論、財政論、自由貿易論の三つであった。大隈は、維新前後からの日本の維新の成果を評価しながらも、「代議」制度など政治の内実が不十分と見た。また、そのような状況では国民の力を結集できず、政党政治の展開など日本よりも国民の力を結集している列強に後れを取るの、「責任内閣」が必要であるとする。「責任内閣」とは、天皇と国民の代表である議会の双方に「責任」を持つ内閣で、大日本帝国憲法の運用の当面のあるべき姿ととらえる考え方である。 381-383

大隈は「責任内閣」論に加え、政策体系の第二のポイントとして、「小さな政府」論を唱えた。「小さな政府」論とは、民間の創意工夫を重視し、政府の事業を限定的にして、増税や成果に裏付けのない不換紙幣の乱発を避ける論を展開した。例えば、国有に反対し民営を主張する意見を述べている。 384

政策体系の第三のポイントは、「自由貿易論」である。大隈は列強との強気の交渉をして条約改正を行い「国権」を伸張し、自由貿易を展開すべきだと考えていた。大隈は条約改正の推進派であったが、(外国人が居留地を離れて自由に活動できる)内地雑居を禁ずるのは列強を恐れる意気地なしの気持ちに過ぎず、交渉を不利にするだけである。「内地雑居」さえ認めれば、列強は治外法権維持に固執せず、撤去しても「自由及び利益」が拡充することを期待するだろうとみていた。 386

1894年(M27)、日清戦争が始まった。9月17日黄海海戦に圧勝し日本の勝利は確定した。 391

第IV部 力闘編

第11章 ポピュリズム的手法

一日清戦争後の経済論・対外硬と進歩党

日清戦争に日本が勝利し、1895年(M27)講和条約として下関条約が結ばれた。日本は旅順、大連などを含む遼東半島、台湾と賠償金2億テール(約3億1000万円)などを得た。また、清国は朝鮮半島を属国とする特殊な権利を放棄し、沖縄全てが日本の領土であることを認めた。 403

ところがロシアの主導のもとドイツ、フランスの三国は、日本が遼東半島を領有することは清国の独立を危うくするとして、返還を勧告する三国干渉を行った。日本にはロシアを中心とした三国に対抗できる軍事力はなく、勧告を受託した(伊藤首相、陸奥宗光外相)。 406

(講和条約の受託に伴い、伊藤内閣に対する対外硬派の活動が活発化してきた)。大隈は、伊藤内閣の責任を迫及する動きには関わらなかった。対外強硬論に加担しなかった大隈は、清国に勝つてのぼせ上がっている対外硬派や国民に列強と比べた日本の実情を理解させようとした。大隈は、日本の国力と世界の一等国を比較すると、なお「一と十の差」があり、軍備、富力、知識、商業、貿易、学術、工芸、信用の制度の一つとして及ぶものがなく、日本ははるかに「後進国である」と述べている。 406-407

1896年、旧対外硬派を結集し、進歩党が結成された。旧改進黨 51名、旧革新等 33名、旧大手倶楽部 6名、旧中国進歩党 5名など合計 103名であった。こうして第一議會以来の大隈の念願であった衆議院の第一党の自由党に匹敵する政党が生まれた。 416

大隈は、世界の流れからみて、これからの 10年間に東京市をはじめ大阪市、京都市、名古屋市などの主要都市が膨張するとみていた。大隈は、まず新興国アメリカのニューヨーク・ワシントン・シカゴの膨張を述べ、次いでイギリスのロンドンも人口 500 万に膨張したという。またフランスとの戦争に勝利したドイツのベルリンも戦後に膨張したと説く。日本は、アメリカのような新興国という要素と、日清戦争に勝利したという二つの要素を持っているので、東京はさらに膨張する楽しみがあると見た。 418

大隈は、市区改正事業が遅れていることと関連させて、道路拡張、上水道、下水道、ガス、電信電話施設、市街電気、鉄道施設、などを今後の課題と述べている。 420

1896年 (M29)、大隈は 28年ぶりに佐賀市に帰省した。佐賀藩領に滞在したのは 4月 25日～6月 17日までの 22日間であった。その後、関西を訪れ、5月 24日には次期政権を作ることが世評になっている薩摩出身の有力者松方正義 (前首相、蔵相) と京都市で会見した。 422

1893年から大隈は、継続的にジャーナリズムに登場するようになる。「昔日譚」では、長州系、薩摩系の指導者伊藤博文、井上馨、山県有朋、松方正義、黒田清隆よりも維新後の大隈は大物だったこと、三条実美、岩倉具視や木戸孝允、大久保利光、西郷隆盛、板垣退助らとほとんど並んでいたことを、言外に述べている。 428

佐賀の講演で、大隈は北はロシアのウラジオストク、朝鮮、満州、西は中国本土の、上海、香港、南は南洋、オーストラリアなどと貿易をすべきという。イギリス、スイス、ベルギーなどの国は貿易によって発展したので、九州、特に佐賀県もそうなるべきだと論じる。さらに、中国に最も近いのは九州であること。中国の貿易の可能性を大きく強調した。大隈は、世界や日本の体制を知るのみならず、佐賀人が積極的に海外に進出すべきと激励したのだ。 436

日清戦争後の 1895年 (M28) 大隈は、海軍などの軍備拡張によって政費が拡張することは避けられないと見ていた。しかし大隈は、清国から入る償金の 3億円と遼東半島返還の代償

6千万円の合計3億6千万円は臨時収入の性質があるので、經常の費用に使うべきでないとする。償金の使い道は3年～5年後に世界大博覧会を開き、殖産産業を奨励し、世界各国に「新勝国」日本の実情を知らせたり、帝国大学の基本財産を増殖し、更に数個の大学を設置するなど子孫に伝えるべき戦勝の記念とすべきである、と主張する。 444

大隈は、国は農業から工業、さらに商業へと発展していくととらえ、商業が発展した国が最も発展した国であると見る。そして、海外との取引、貿易に日本の発展の可能性が握られていると見る。国民、とりわけ実業家は、自立した精神と国際的な視野を持ち、生産と取引に力を発揮し、イギリスのように貿易で利益を上げて富を蓄積することを理想とした。 448

(そして大隈は、経済発展観をつぎのように述べている。)

その第一は、いまや日本の国力の進展とともに、日本国民の抱負は大いに高まっていると見る。そのうえで、日本人は十分に欧米人と競争する力があると断言した。日清戦争で自信がついた国民を鼓舞したのである。 448

第二に、イギリスの商業は自由貿易を主義として「大陸」を相手として、いたるところで「競争」してきたので発達してきた、とイギリスを理想のモデルとしてとらえる。 448

第三に、列強に対抗するためにも、更なる教育の充実を主張した。……日本の学者は「発明」を欧米にゆだねて、その成果を模倣するという姿勢でいるが、もっと発奮すべきであろうと批判する。 449

第四に、日本の商業(貿易)の発展のためには、日本の商人の道徳を高める必要があるとみる。大隈は、「商業は平和の戦争なり」とまで、商業を重視する姿勢を示した。また、欧米人のほうが日本商人に比べて誠実であると述べている。 449

第五に、経営者と労働者の関係についても、労働者の賃金が上昇して、経営者と労働者の双方が繁栄するのが望ましいとし、「社会主義の破壊論が広がらないためにも必要だ」とした。 449

第12章 薩摩派との関係を断つ

—松隈(シヨウケイ)内閣での決断

1896年(M29)、松方正義に組閣の命が下りた。大隈と松方への期待が大きく、いわゆる大隈内閣が出来る方向が定まった。松方が首相と蔵相を兼任し、大隈が外相となることがこの内閣で合意された。 453

大隈は、農業から工業さらに商業へと「文明の進歩」にともなって産業が変化すると述べる。イギリスやフランスのような「文明国」はすべて商業国である。商業には貿易が必要であり、貿易

には航路の開設と為替業務が必要となる。19世紀のポレオ戦争後、今までに大きな戦争が起きていないのは貿易が盛んであるからで、貿易は世界の平和と非常に関係がある。 458

1897年(M30)、松方内閣が地租を増徴する方針を固めると、大隈外相と進歩党は提携を断絶する方針を固め、大隈外相と就官した進歩党員は辞表を提出した。これ以上の提携は、政党政治に向けての党勢拡大にとって有利にならないと判断したからである。大隈の外相兼農相の辞任直後から大隈は意気軒高であった。今は全く自由の身になって大いに安心したので、これから「一生懸命に得意の花を培養するさ」と述べ園芸談を始めた。大隈は、園芸道楽を明治7年ごろから始めていた。大隈邸には「植物温室」もあり、バラに強い関心を示し、1896年春からは菊の栽培も始めていた。(大隈は時機到来のチャンスを探っていたのである。) 473

第13章 念願の組閣

一隈板内閣の122日

1898年(M31)6月30日、第一次大隈内閣が成立し、大隈は首相兼外相、板垣が内相に就任した(隈板内閣といわれた)。同年10月31日、日本で最初の政党内閣であった大隈内閣は、任命の段階から不安定な状況にあり、組閣後は藩閥勢力・自由党系などの包囲網が形成されジャーナリズムなどにも内閣が見放され、ほとんど成果を上げることなくわずか4カ月で崩壊した。 489、506

大隈は、「日本はあたかも10年前に退却したように見えるが、過去30年を追想すれば、国の富、教育の進歩、知識の普及など明らかである。今回の現象は「一部面の小波瀾」のみで、大勢はついに前進するのであると強気の姿勢を示した。 507

完(上巻)